

研究課題	情緒応答性尺度日本語版の開発と極低出生体重児の母子関係評価への応用に関する研究
研究代表者	森岡 由起子 (心理社会学部 臨床心理学科 教授)

### (1). 研究目的

乳幼児の母子関係を客観的に評価する方法は数多いが、実験室だけでなく家庭や保育園など日常的な場面で記録されたビデオを解析することで、母子の関係性を評価できる方法として、Emotional Availability Scale (情緒的応答性評価尺度：以下 EA Scale)がある。コロラド大学の R.Emde らとともに、この尺度の第4版を開発したのがコロラド州立大学の Z.Biringen 教授である。

本研究プロジェクトでは、Biringen 教授を大正大学に招聘し、すでに翻訳が終了している日本語版を用いた情緒的応答性評価尺度の研修会を開催した後に、その尺度を用いて、日本の極低出生体重児などの臨床例の母子関係評価への応用を行うことを目的とした。具体的には、以下の通りであった。

- ① 情緒的応答性尺度第4版(著作権は Biringen が所有)日本語版テキストの作成
- ② 大正大学にて3日間(参加費 10 万円)の研修を実施し、情緒的応答性尺度の認定者を20人養成する(現在日本ではまだ4人程度)
- ③ 日本語版の情緒的応答性尺度評価が、乳幼児と保護者・養育者などとの関係性評価として有用であることを実証する。

### (2). 研究方法

平成28年度の申請時研究方法は、11月に以下のように訂正再申請された。

①情緒的応答尺度の日本語版はすでに2016年に山下が完成(2014)しているが、その校正を行い、Biringen の許可を得て、英語版と日本語版を見開きで比較しながら参照できる研修用のマニュアルを作成し、Biringen の監修のもとでボルダーにて印刷する。この作業は、2017年3月にコロラド大学を訪問する予定でいる森岡・生地が中心となって進める。このマニュアルを含めて、研修会資料などは、研修参加費で支払うものとする。

②2017年5月下旬(予定)に情緒応答性尺度の開発者であるコロラド州立大学 Z. Biringen を招聘し、大正大学で Emotional Availability (EA) Scales 4<sup>th</sup> Edition の日本語版を用い20名の参加者で3日間の資格認定のための研修を実施する。(コロラド州ボルダーで2013年に森岡らが参加した研修会も3日であり、昨年度受講証明書を提出している。)

③評価認定資格を取得しようとしている専門家だけの研修会を4日目に、参加者100名程度で、レベル I : Basic 研修会を1日開催する。情緒的応答尺度の評価資格認定研修と Level I : Basic 研修会を以下の日程で実施する。研修会のマネージメントは、森岡・井潤・大西が中心に行う。

2017年度は、この準備となる研修会を6月に開催する予定する。また文化的比較研究のため、日本の母子相互作用のビデオ記録(極低出生体重児の母子、養護施設入所児童と施設職員など)の撮影を実施し、共同研究者での検討を行う。

## 研修会日程

- 1 日目 : 研究室での構造化された就学前の事例ビデオ提示と評価実習・質疑応答
- 2 日目 : 構造化された乳児・幼児・思春期の事例と構造化されていない家庭訪問事例のビデオ提示と評価実習・質疑応答
- 3 日目 : 日本での保育園、児童養護施設事例などでの保育者と子どもの事例のビデオ提示と評価実習および総括討論
- 4 日目 : 午前 **Biringen** による情緒的応答性の背景となる理論の講義  
午後 **Biringen** による情緒応答性尺度の内容と評価方法についての講義  
すでに資格を持っている日本の専門家の事例提示を行い **Biringen** から助言指導を受けるアドバンスコースの研修会を開催する。

さらに、日本の事例について **Biringen** との評価を一致させる作業がある。この作業は、インターネットを通じたやり取りで進める。これは、森岡の他に本島、生地があたる。

日本の事例については、研究の内容を説明し、保護者・施設管理者から文書で研究への同意を得るものとする。研修で用いるアメリカの事例については、すでに **Biringen** らによって保護者から文書での同意を得ている。

なお、母子相互作用における極低出生体重児と対象児研究については、大正大学倫理委員会と山形県立中央病院の倫理委員会の承認を得ている。

### \*研究方法が訂正変更について

2016年11月12日に提出した「研究計画変更願」にあるように、来日の約束は3年前からできていて、**Biringen** からの来日のための契約書も送られてきていたが、研修会実施は2017年5月(現地での打ち合わせにより9月となった)に延期となった。

延期された理由は、日本語版テキストの編集・印刷を日本ではなく **Biringen** の元で行わなくてはならない条件となったため、双方向の打ち合わせに時間を有したこと。**Biringen** がロシア系トルコ人であることから、メール及びスカイプによる交渉では相互理解が充分でなかったこと、**Biringen** が研修による資格を得るための参加者について、審査を厳密にしたことなどがあった。

### (3) 研究の成果と公表

前述のことから、平成28年度は **Biringen** と共同研究者2名の来日予定を延期し、申請者と共同研究者で **EAScake** 評価認定資格を持つ生地新(北里大学医療系大学院教授)と2017年度から共同研究者となる大西真美の3人でコロラド大学の **Biringen** のもとを訪問し、テキスト、セミナー日程と内容についての打ち合わせを行った。3月28日出国31日帰国するスケジュールとなったが、帰国子女でもある大西の通訳で十分な意思疎通が可能となり、**Biringen** のサバティカル期間となる9月7日から6日間の来日が決定した。

メールおよびスカイプによる打ち合わせでは不十分であった緻密な交渉を持つことが可能となった。また打ち合わせにおいて、レベル1の資格認定者で、日本での事例を出す者に対しては、**Biringen** のスーパービジョン後、レベル2の資格を貸与されることとなった。(日本人でレベル2の有資格はまだいない)

なお、今回の支出経費は森岡・大西の航空旅費と宿泊代のみとなっている。

近年、発達心理学、臨床心理学の領域で、母親と乳幼児の情動への関心が高まっている。これまで情動表出に関する母子研究の多くは、情動表出に伴う行動レベルに焦点をあてたものが多く、母親の情動認知と児との相互作用に注目した研究は少なかった。

「情緒的応答性 (Emotional Availability)」は、初代乳幼児精神保健学会会長であったコロラド大学の児童精神科医 R. Emde 教授が提唱した概念(1988)で、乳幼児が非言語的コミュニケーションによって伝えてくる情緒信号を適切に読み取って、適切に応答する母親の心的機能を定義したものである。情緒応答性が障害されると、発達早期の母子関係や乳幼児の心理・身体状態に様々な問題が生じてくるとされ、特に乳児期において脳の発達にも大きな影響があることが実証されるようになった。この母子相互作用における情動を媒介とした関係性(情緒的応答性)は、相互作用における行動の量ではなく、文脈において判断される性質のもの(Biringen2000)であり、R.Emde が提唱した「情緒的応答性」概念は、今日の母子関係のアセスメントと支援には欠かせない概念となっている。

母親が乳幼児の情動をどのように読み取るかを把握するツールとして、R.Emde らが開発した、I Feel Pictures (Infant Facial Expression of Emotions from Looking at Pictures: 以下 IFP)があり、小此木らによりその日本版も開発され(1990)、われわれもこれまで産後うつなどの臨床領域で使用してきた。しかしこの評価法は、12 ヶ月の子どもの顔写真 30 枚から情動を読み取る力を評価するもので、母親自身の情動投影が強くなされ、情緒的応答性の能力が評価されるが、母子の相互作用を評価することができなかった。そこで母子相互の情動を媒介とした関係性が日常場面でダイナミックに展開する様子を直接観察して評価する方法として、EAScale が開発された。

申請者のこれまでの業績としては、母親の情緒的応答性を評価する日本版 IFP を岩田ら大学院生とともに国内外の学会で発表、論文化してきた。情緒的応答性に関しては、母子関係を直接評価するツールの必要を感じていたところ、R.Emde から Biringen と EAScale を紹介された。2008 年に発表された EAScale は 2010 年にはすでに世界 57 カ国で使用されていた。しかし、日本では、言語の壁もあり、充分には普及していない現状にある。

九州大学医学部こころの診療部特任講師の山下洋と、日本での翻訳と使用の必要性を話し合い 2013 年に翻訳とバックトランスレーションを終了した。2013 年、森岡・生地・山下はボルダーでの 3 日間の EAScale 研修に参加し、その際に Biringen から来日の承諾を得た。

従来、英語のマニュアルしかなかったためにこの EAScale の訓練は、北米とヨーロッパが中心であった。情緒応答性の評価が日本では困難であったが、今回の研究が実施されることで、原版を開発した Biringen の協力のもとで、日本での情緒応答性の評価が可能になると考えられる。

近年の日本では、児童虐待の問題や自閉症スペクトラム症などの発達障害への支援が注目されているが、母子関係の客観的な評価方法がなく、科学的な評価に基づいた母子への支援計画を立てることがむずかしかった。情緒応答尺度の普及に伴い、そのような客観的な評価方法が日本にも根付く契機となる可能性もある。この評価方法が確立すれば、乳児院

や養護施設などにおける養育者の支援にも有用と考えられ、汎用性の高い評価法といえる。

本研究は平成 29 年度の継続研究が認められており、現在セミナー参加者希望者はオープンにしていなくてもかかわらずすでに 10 名以上となり、テキスト作成とともに研修会の準備を進めている。

成果の公表については、世界乳幼児精神保健学会、児童青年精神医学会、小児精神神経学会などを予定していて、各学会誌への投稿も予定している。

また、本年度は「極低出生体重児のアセスメントと支援について」は明治安田生命社会事業団助成金を申請し、来年度の文部科研助成にも申請予定でいる。

昨年度は以下の論文を投稿し、現在日本母性衛生学会の学会賞対象論文候補として審査中である。

岩田裕美、森岡由起子：妊婦及び母親のメンタルヘルスと情緒的応答性 ー日本版 I Feel Pictures (JIFP) による早期母子関係性支援のための基礎的研究ー. 母性衛生  
57(1):123-130,2016

#### 参考文献

Morioka Y, Oiji A, Shibata K, Watanabe M, Aeba S: How perinatal factors and psychosocial factors in the obstetric ward affect the intelligence and behavioral problems at the age of three years among the very low birth weight children? Proceedings for 14<sup>th</sup> World Congress of World Association for Infant Mental Health, 2014

Iwata H, Morioka Y, Oiji A: How maternal style of emotional cognition and depressive tendency affect mother-infant interactions? Proceedings for 14th World Congress of World Association for Infant Mental Health, 2014.

岩田裕美、森岡由起子、長屋佐和子：妊娠後期と産後三ヶ月児の母親の情緒認知特性と母子相互作用についての検討：乳幼児表情写真(日本版 I Feel Pictures)と行動観察を用いて. 乳幼児医学・心理学研究, 22(1)  
: 43-57, 2013.

Oiji A, Morioka Y, Sawa T, Inoue K, Nagata Y, Sato M et al.: Game of disappearing-reappearing and hide-and-peek in psychodynamic play therapy with maltreated children. Proceedings for 20<sup>th</sup> International Congress of International Association for Child Adolescent Psychiatry and Allied Discipline.